ラテン語とフランス語 2

名言・金言による比較言語学

秋山 学

今月号では，ラテン文学史を遡ることにしようと思います．古典ラテン文学は，いったい誰から始まるのでしょうか？

古典ラテン文学史の上で最初に名前が挙がるのは，リウィウス・アンドロニクス（B.C. 284–204）という詩人で，彼が残したホメロス『オデュッセイア』のラテン訳がラテン文学の始まりとされています．もっとも独創的なラテン文学としては，エンニウス（B.C. 239–169）による『年代記』（*Annales*）を待たねばならないでしょう．彼はこの作品を叙事詩韻律で著しました．以下大雑把に説明しますと，叙事詩とは「長短短脚六韻格」（dactylic hexameter）と呼ばれる韻律によって歌われるものです．韻律は，近代語による詩（フランス詩を含みます）では「強 / 弱」のアクセントで捉えられますが，古典詩では，それが音節の「長 / 短」で計られます．叙事詩の「脚」，すなわち「長短短」（dactyl）のうち「短短」の部分は一つの「長」音節で置き換えることができ，したがって一つの脚が「長長」（spondee）でも構わないのですが，これを多用すると非常に重々しい詩になり，逆に短音節を多く交えると軽快な印象を与えます．総じてギリシア語の語彙は短音節を多く含むのに対して，元来ラテン語の語彙には長い音節が多く，ラテン詩法の完成は，ウェルギリウス（B.C. 70–19）やホラティウス（B.C. 65–8）を経て，天才オウィディウス（B.C. 43–A.D. 17）がようやく成し遂げます．

さて，エンニウスの『年代記』は全18巻よりなる大作で，アエネアスのラティウム上陸に始まり，王政とそれに続く共和政の推移，ローマ人が成し遂げた数々の輝かしい戦績を歌い，エンニウス自身の同時代にまで及んでいました．しかし原文は失われたため，後代のラテン著述家たちの断片的引用を編纂したものから，その全貌を推測する以外に方法はありません．この作品は，『アエネイス』を記したウェルギリウスをはじめ，同名の『年代記』を著したタキトゥス（A.D. 55–120）など，後世の著述家たちに大きな影響を及ぼしました．今回はこのエンニウスによる『年代記』から，第二次ポエニ戦争（B.C. 218–201）の頃を描いた第12巻の一節を引いてみることにしましょう．なお，音節の計量が標準文法とは異なる箇所があります（ponebāt）．

［原文］ Unus homo nobis cunctando restituit rem. / Noenum（= Non）rumores ponebat ante salutem; / ergo postque magisque viri nunc gloria claret. /

［仏訳］Un seul homme par ses atermoiments rétablit notre situation, / Car il ne mettait pas sa renommée au-dessus de notre salut; / Aussi dans la suite et plus encore maintenant, brille la gloire de cet homme. /（ビュデ版による）.
［拙訳］一人の男が，逡巡する（< cunctor）ことによって，われわれのために国家を再興した．/ 彼は（自国民の）救済よりも（自らの）評判を重んずることなどしなかった．/ こうしてこの男の栄光はその後，そしてさらに今日，より一層輝いている．/（*Annales* XII. 360–62, ed. Warmington）.

ラテン語原文では「逡巡することによって」の部分に ‘cunctando’ という「動名詞」（gerundium）の奪格形が用いられています．ラテン語の「動名詞」は，フランス語では「ジェロンディフ」と訳されます．しかしフランス語のジェロンディフといえば，〈前置詞 en + 現在分詞〉の形をとって副詞的に働き，主動詞に関わるものを指しますね．一方ラテン語の「動名詞」は中性名詞で，主格以外の格（斜格）に変化し，たとえば属格形で名詞の修飾語となることもできますから，両者はだいぶ異なります．

それから今回の用例で分かるように，ラテン語を近代語に訳した場合，ふつう訳文のほうが長くなります．ラテン語には冠詞が存在せず，主語も明示しない場合が多く，前置詞句を用いずに名詞の斜格形で修飾語句を形成することが可能であり（e.g. ’viri’），‘postque magisque’ のような対句表現が好まれる，などの点がその理由だと思います．

内容に移りましょう．この「一人の男」というのは，クイントゥス・ファビウス・マクシムス・ウェッルコーススのことで，彼は，ガイウス・フラミニウス率いるローマ軍が，B.C. 217 年にトラスメヌス湖畔（現ペルージャの西方）でハンニバルに大敗を喫したため，それを受けて独裁官（dictator）に任命されます．ファビウスはカルタゴ軍に対し，ゲリラ戦を仕掛けつつ会戦を避けるという作戦に出て，彼らを大いに疲弊させます．けれども当初この作戦は，同胞のローマ人たち，特に同僚ミヌキウス・ルフスの理解を得られず，ファビウスは ‘Cunctator’（逡巡屋）という蔑称を与えられてしまいます．彼の意図と作戦の効果を見抜いていたのは，当の敵将ハンニバルだけであったと言われます．しかし血気にはやるミヌキウスの突撃が失敗し，ファビウスにより彼が救出されると，先の蔑称は一転し，ファビウスには上のような讃辞が贈られることになります（プルタルコス『英雄伝』参照）．さらにその後 B.C. 209 年，ファビウスはタレントゥムの町をカルタゴ軍から奪還します．なお引用した句はキケロ『義務について』（I. 24.84）に基づき，また字句は異なりますが，特に一行目はウェルギリウスの『アエネイス』（VI. 846）や，オウィディウスの『祭暦』（II. 242）にも引かれています．

（あきやま・まなぶ）